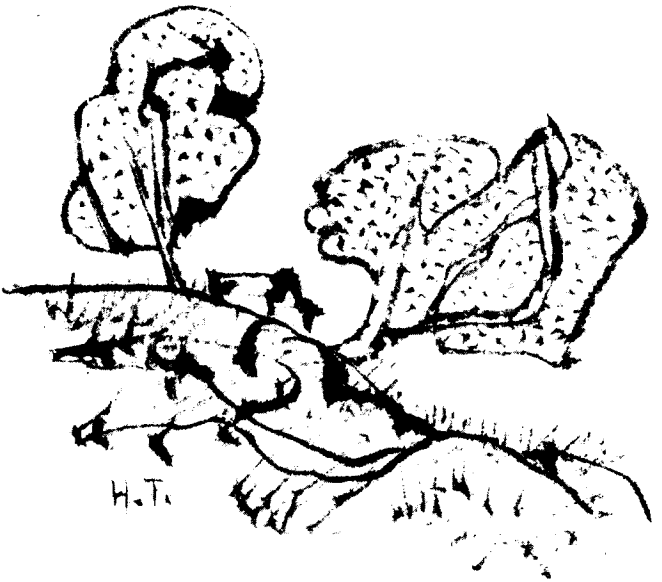
愚者の知恵

福原麟太郎



愚者の知恵

福原麟太郎

新潮社版

愚者の知恵

昭和三十二年六月十六日　印刷
昭和三十二年六月二十日　発行

定価　弐百七拾円
地方売価　弐百八拾円

著者　福原麟太郎
東京都新宿区矢来町七一

発行者　佐藤亮一
東京都品川区大井寺下町一三〇

印刷者　曾根盛事
東京都新宿区矢来町七一

発行所　株式会社新潮社
電話東京(34)代表七一一一―九番
振替東京八〇八番

（乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。）

印刷・扶桑印刷株式会社　製本・新宿 加藤製本所

© by R. Fukuwara Tokyo, 1957. Printed in Japan

目次

読書の愉しみ

読書の愉しみ……八
日向の読書……八
読書有閑……一〇
読書日記……一四
良書を知らせよ……一五
古典の道しるべ……二七
辞書というもの……三〇
読書ということ……三三

人間形成

人間的なものへの興味……四一
限りなき浪漫……六六
大人の文学……七五

女流学者の五つの型……八四
学校と人間形成……九〇

ある日本人

学　　位……一〇三
青年の感激……一〇四
君が代――宮廷……一〇七
成人の日……一〇九
修身科の復活……一一四
勲章と民主主義……一一七
十一月三日……一二〇
大衆の善意を尊べ……一二三
オリンピックと国連……一二六
移民・新しい日本人……一二九

漱石三題

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

漱石についての私見……二三六
個人主義解説……二三九
プロイセン号……二四五

イギリスに関する六章

イギリス人……二五六
イギリスのこと……二六〇
英国からの手紙……二七四
イギリスのヒウモア……二七六
シェークスピアの智恵……二八八
英国の良識……二〇一

ラジオを聞く

お能始めませい……二〇八
生活の合間のラジオ……二〇九
アマチュアと芸人……二一一

三代に生きて……二二三
首相に望む……二二五
逍遙・愛情・女性……二二七
シェークスピア特集をきいて……二二九
芸なしの芸能家……二三一
春を迎える番組……二三三

故人を偲ぶ

同僚としての藻風……二三〇
喜安先生……二三三
加藤武雄氏の追憶……二三八
上田辰之助博士を憶う……二四一

静かに生きる……二四七

あとがき……二七一

愚者の知恵

読書の愉しみ

読書の愉しみ

ねる前まで読んでいて、あとは明日にしようと、残り惜しくも本を閉じ、あしたの朝を待つ心持で枕につくとか、外から家へ帰ってくるとき、帰ったら、あの本にすぐ取りつこうぜと心に思いながら、電車に乗っている、というようなことは、決して無くはない。私自身の経験にも、そのような時代があった。今から思うと、どんなに貧乏でも、どんなに辛いことがあっても、そういう時にその人は幸福なのである。小説、詩歌の本に限らない。無味乾燥と思える学問の書でも、そういう楽しい執着をもって、がむしゃらに読めるものである。読書の愉しみというのはそれだ。それは生きることと共にある愉しみというものではないであろうか。

日向の読書

病気になって、しじゅう家の中にいると、庭の芝生へ椅子を出して、それに坐って本を読む

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

ということが楽しみの一つになる。健康なときもそうであったが、今は尚更である。秋の太陽を浴びながら、日除けの帽子をかぶって、そのかげにページを開いて読み耽るというのは、実に贅沢なことだと思うこともある。

以前私は、そういう時、よく色眼鏡をかけて、太陽の直射を防いだこともあった。老眼鏡の上にまた色眼鏡だから、われながら、そのいかめしさを可笑しく思った。しかし便利であった。ところがその色眼鏡は、一昨々年、イギリスへ招かれて夏一と月旅行したとき持ってゆき、手提カバンの中へ入れていたのを、誰かに踏まれて、こわしてしまい、ウェストミンスターのホテルの屑籠へ捨てて来た。

どうしてそんなものを持って行ったかというと、印度やなんかの空港へ下りたとき要るかも知れないと思ったのと、その眼鏡は元来、その二十四年前、留学中、南欧を旅行して、スイスのローザンヌの一円均一店みたいなところで買った、その思い出もあったからである。その時は、雪が積っていたので、雪の反射を防ぐために買ったのであった。そしてそれは、それからギリシャへゆくと、太陽の明るさを防ぐために使われたものだ。あのギリシャの春の外光の明るさは無類であった。あのまぶしい白光の中でギリシャ文学が生れたのだと思った。

そんなことも遠い夢になって今は、十坪の庭の芝生が私の君臨する世界である。街へも出あるかれず、雨が降ればすぐ寝床の中へ退却する身の上となってしまうと、読書こそは唯一つ、広い世界を開いてみせてくれるものだ。キーツが様々の国の文学を読んで

われ黄金の国をあまた旅し

と歌った心持をしみじみと味わうことになる。

平田禿木先生が、永い間の座業のせいでか、晩年だんだん、歩くことが不自由になられ、従って外出も少くなってからはもっぱら食べものあさりのことを読みも書きもされ、また旅行記を好んで、地図を並べて、その行程を想像することを喜んでいられた心持が、今になって解る。私もこの頃、人の旅行記を読んでは、何かというと地図を出して見るようになった。

いまのところ私のもっとも望むことは、広島県の郷里の家へ帰って、秋の、柔らかに温かい日光に照らされながら、もうそろそろ朽ちかけている、居間の縁側で、昔の本を、蔵の中から取り出して来て、なつかしくめくってみることである。私の子供の時や、中学生の時代に愛読した本が沢山ある。巖谷小波のお伽話もあれば、金子薫園の歌集もある。また亡くなった父が読んだ、明治二十年ごろの稗史小説も蔵の中にはしまってあるのだ。それらを、あの縁側の日向で読むことである。

（三一・一〇、朝日出版月報）

読書有閑

私は余り読書家でないので、しじゅう手から本を放さないというような生活はしていない。去年半歳近く病院に入っていた折なども、入院するときは、本も必要だろうと思って、インデ

ィヤ・ペーパー本のイギリス小説を六、七冊、鞄の中へ入れたのであったが、一冊も読まなかった。その日その日の新聞を読み、その時々に著者や出版社から頂戴する書物を、枕の上にぶら下っている書見器につるして、毎日すこしずつ拝見して居れば、それで無事に日が経った。日本語というものは、何とよくわかるものだろうと感心したものだ。英語の小説を一冊も読まないで持って帰ったのも、当然である。

もっとも、せんだって、狂言「千鳥」を演じてアメリカへ帰ったキーン氏の「日本文学小史」だの、やはり近ごろイギリスへ帰った詩人エンライト氏の「露の世」という随筆集、大仏さんの「帰郷」の英訳本などは覚えているから、その折々の興味の対象になるものは、英語でも読んだのであったろうか。

いま「露の世」をぱらぱらめくってみると、九二ページのところに、そのとき下線を引いた数行がある。「われわれは、みな吉田健一を愛する。良い男だ。だが、それは間違っている。われわれは、みな寄ってたかって彼を仲間はずれに（オストラサイズ）してやらなくてはいけない。そうすることによって、彼の凶悪なる親爺に反抗する意志を示さなくてはならない、――と新聞に書いた日本の文士がある。そしてそれは大まじめなのである」とエンライト君は言っているのだ。

これはどうもおかしい。その文士は伊藤整氏で新聞は朝日であった。私はよく覚えている。伊藤氏一流の、逆説の中に真理を含め、皮肉の上に愛情を浮べる書き方の、美しい例であった。

「大まじめ」（デッド・アーネスト）な、まっ当な、もの言いではないのだ。エンライト君にそれを伝えた学生かだれかの言葉がよく真意を伝えなかったのであろうが、こういうことは、よくある。

「日本文学小史」の中でも「細雪」（ささめゆき）を「薄雪」（シン・スノウ）と訳してあった。ささめ雪というのは、薄く積った雪ではないはずだ。井上頼圀著「新辞典」によると「こまかに降る雪」とある。なるほど英訳はむずかしい。今何とか訳せと言われると私も困るが、薄雪ではないだろう。

そういうことは外国の文学を翻訳するときに、当然出くわす問題で、しかも到底避け得られない難関である。大仏さんにもきっと原作者としての不満はあるに相違ない。それを思うと、われわれ日本人の、日本語に対する語感の細かさ鋭さというものは、めざましいものだ。安心して読める自信がある。私などは一生英語の教師をして、これで正しい感覚で読んでいるだろうかと、いつも不安であった。六十にして病気にたおれるのも無理はない。どのくらい、間違ったことを教え、うそを知らずに学生に覚えさせたろうと思うと、外国語の教師は、そら恐ろしい。

しかしそれは、教えるものの立場または批判的な立場で書物に接するから、そんなことになるので、ただ読んで楽しむつもりなら、大したことではないかも知れない。

わかって面白いだけ面白がればそれですむ。そしてそれで十分読書は楽しいのである。

私は塩谷栄先生――いまも八十何歳でお達者で、半世紀前、蘆花の「不如帰」を訳され、近

年は林芙美子の短編などを訳してアメリカの雑誌に載せたりしていられる――から英語を習ったが、イギリス小説を読むとき、はじめ五十ページくらいは無我夢中で読むんですよ。わからなくてもいい、そのうち面白くなります、と教えられた。実際そうなのである。それは先生自身のご経験でもあったであろう。

それで私も、はじめ五十ページくらいは、めちゃくちゃに読んで、そのうちに機が熟して面白くなるのを楽しみにするという、家伝の法を、自分でも試み、人にも伝えていたが、そんなことをしなければならないのは、英語という外国語がむずかしい言葉であるうえに、イギリス小説の書きはじめが、いつも、しんねりむっつりしていて、すべり出しが悪い、その拙さにも原因しているのであろうと考えていた。そしてそれは必ずしもでたらめの説ではないと今も思っている。それに比べると、日本の小説の書き出しは上手である。下手な人もあるが大体は巧みである。すらすらと物語の中に入ってゆける。

そんなことを考えていた。そしてこないだ台風の余波でひどい雨風になった夜、毛布を重ねた寝床の上で、つれづれに「剣法奥義」という剣豪列伝を読み始めたが、話が始まると、何々藩の誰々の弟子、そのまた何とかの何とかと、系譜がうるさい。面倒だからいい加減にして先へ進むが、おしまいにはどの話も恐ろしく面白い。魅力に満ちている。

どうもあの冒頭の晦渋さは、空気をつくるために工夫されたものであって解っても解らなくても良いものらしい。

（三一・九・二二、東京新聞）

読書日記

1

大正三年というのは、一九一四年で、第一次世界大戦勃発の年である。その年に書いた読書日記というものが見つかった。この一冊は四月二十六日に始まっている。この日生れて始めて、荒川で、競漕用ボートを漕いだ、また所沢で、某中尉がモーリス・ファーマン機と共に破砕惨死した、と誌してある。そして、この春、帰省の車中または郷里の家で、芳賀矢一「日本人」、新渡戸稲造「修養」、オクスナム「琥珀の中の蜜蜂」という英詩集を読んだと書いている。オクスナムという人の詩はその後また一冊何か読んだことを覚えているが、これはキリスト教の信仰をうたった詩であった。そのころ二十歳の学生は、そのすくなくとも一人を例としていうと、こういう本を読んでいたのである。それらは、修養書というべきものであったであろう。

四月三十日には、こないだ銀座へ行って、ハンネレの昇天の絵葉書を買って来たから、小山内薫の「近代劇五曲」の中の「ハンネレの昇天」を読んだ。それから、佐々木信綱の「新月」、杉村楚人冠の「厲人厲語」を読んだ、とある。それらが、当時の学生の接した文学書の一例で

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook